## リレー**放談(第1話)「文明論之概略を意識して」** (11期生K組) 山本 靜成

何度かやってきた寒波で九州北部の今年の桜は、例年より早く、おかげで入梅は5月15日ごろ(平年より20日ほど早い)だったようで1951年以降?の早さだそうです。あらためて、つながって行く四季の移ろいを感じております。今夏も連日猛暑の予感がします。

さて、以下の「文明論之概略を意識して」は、国立病院機構を卒業する際に全国国立病院療養所放射線技師会会誌248号に寄せたエッセイです。東京電子専門学校同窓会会員の皆様にご一読いただけますと幸いに存じます。

新型コロナウイルスへの対応が長期化する中、第一線で奮闘されている医療従事者の皆様ご苦労様です。大規模等ワクチン接種も始まりましたが、あらたな変異株も発生し、不安がつきまとい続けております。先ずは、自愛専一でありますようお願い申し上げます。

第2話は、東京大学医学部附属病院放射線部の更 科岳郎さんにお願いしております。

@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@@

今、昔日の思慕にいます。私は、今年度をもって 国立病院機構を去ることになりますが、これまでの間 に多くの方々に支えていただき感謝の念に堪えませ ん。これまでのご交誼に衷心より御礼申し上げるとと もに、本会の益々のご発展・繁昌祈願を込め投稿しま した。略歴としては、技師一筋の38年ということに なります。振り返れば、それぞれがかけがえのない 日々でした。そこで、この紙面をお借りして少し話を してみたいと思います。

私は、昭和57年4月現在の横浜医療センターに 就職し、医療人として第一歩を踏み出しました。その 後、小倉医療センター、九州医療センター、大分医療 センター、熊本医療センター、別府医療センターの5 施設を異動、単身生活は合わせて14年になります。 その中で、九州医療センター5年目に起きた技師長急 浙は夏の暑さが残る初秋の予期せぬ辛辣な出来事で、 筆舌に尽くしがたく今も私の記憶の中に深く刻まれて います。これは由々しき事態と後任の技師長人事は凍 結となり院内発令による半年間の技師長代理を拝命、 技師長業務を兼務することになりましたが、例えよう のない空疎感と侘しさ極まりなく押し寄せてくる冷徹 な現実に焦り戸惑いました。無論、森羅万象すべてを 見通すかのように医療マネジメントが出来るわけでは なく緊張する日々でしたが、同時に唯一無二の経験は 私をうつつ戒め双肩を鍛え発揚させてくれました。

その貴い経験から、人馬一体、何ごとにもお互い さま、おかげさま精神へと心中は変化していきまし た。特に技師長に就いてからは、真理の直観を「一方 を証するときは一方はくらし」と解し、主要な場面

(事案)では声高に振る舞うのではなく一貫して生産性のある議論と均衡ある解決につながるよう主張し過ぎず、時には謙抑的に向き合い丁寧な対応に心がけました。幸いにして常套句のように留まることなく一時が流れていく医療の中で、後押ししてくれる多くの同志を得ることができました。とりわけ熊本医療センターで開催した九州グループ主催による診療放射線技師特定技能派遣研修会救急放射線(ER)セミナーは、その果実として実現した他に類のない新しい体験型の臨床技能教育研修システムでした。

福沢諭吉は、著書『文明論之概略』の緒言の中で「恰も、一身にして二生を経るが如く、一人にして両身あるが如し」、と述べています。これは、遷移激動社会と自らの立ち位置を本質的に見事に表現していると思います。1875年(明治8年)、諭吉60歳の時でした。

諭吉は、1835年(天保5年)現在の大分県中 津市に生まれ、父・百助(中津藩士、漢学者)から儒 教教育を受けて育ちました。終焉近くの江戸幕府では 緒方洪庵の適塾で蘭学を、森山栄之助(幕府通辞)からは英語を学び非凡な才能を生かし咸臨丸で渡米、幕 臣のエースとなっています。さらに誰もが知る慶應義 塾を1858年(安政5年)に創立し、明治維新以後 は任官もせず啓蒙的・思想的教育指導者として文明開 化の音がする近代国家形成に多大な影響を与えていま す。

「一身二生、一人両身」の言葉には、2500年 以上にわたって続く万世一系の日本の皇室あるいは日 本古来の固有の文化・伝統と華やかで先進的に尖って 見えた西洋文化の隙間で文明比較論の研究を行い、阿 ることなく「独立自尊」を唱え言論行動を続けた諭吉 の意気込みが強く読み取れます。私は諭吉ほどではあ りませんが、向後新たな幕開けに少なからずこれを意 識するつもりです。

私は、地域に愛されどこか親しみのある古き良き国立病院の時代から、理念先行、経営重視、なんとなく忙しなくゆとりのない感覚に捕らわれ移ろいゆく国立病院機構まで、医療人として関わることができてとても幸せでした。たまゆらの出会いを含めすべてが僥倖であり、そしてその時々の温かいご教示に感謝の気持ちが止みません。最後になりますが、皆様のさらなるご活躍とご多幸を念じ擱筆します。